

# 全能なる神

— 伝統的な神学に見られる六つの誤謬 —  
(チャールズ・ハーツホーン)

大 塚 稔

## Omnipotence and other Theological Mistakes

by Charles Hartshorne

Minoru OTSUKA

### 解 題

ハーツホーン氏は、一昨年めでたく卒寿を迎えられた。1897年6月5日、ペンシルヴァニア州キタニングの生まれである。一九一七年ハーヴァードを卒業、W. E. ホッキング、R. B. ペリー、C. I. ルイスに師事しながら、同大学院に進み、1921年には修士号を、そして1923年には、“The Unity of Being in the Divine or Absolute Good” で博士号を取得。その後2年間はドイツのフライブルク大学、マールブルク大学に留学し、特にフッサールとハイデガーの指導を仰いだ。他に、クローナー、ナトルプ、リッケルト、ジョナス・コーン、エビングハウス、ニコライ、ハルトマン、マックス・シェーラーらの講義も聴講している。1925年、米国に戻った彼は、ハーヴァード大学の助手となり、そこで初めてホワイトヘッドに接した。以後、1928年までハーヴァードに留まった後、シカゴ大学に移り、1955年までそこで教鞭をとられた。この間に1973年に創設されることになるクレアモントを中心とするプロセス・センターの礎石を築かれ、プロセス神学の発展にも寄与された。現在プロセス神学を世界的な視野に立って展開されているプロセス・センター所長のジョン・B・カップ博士は、シカゴ大学での弟子にあたる。なお1956年から62年まではエモリー大学に、その後は、テキサス大学に移り、1963年には、荣誉哲学博士の称号〈Ashbel Smith Professor of Philosophy〉を得られ、名誉教授として現在に至っている。パース協会会長(1950-51)をはじめ、アメリカ形而上学会会長(1954-55)、アメリカ南部哲学・宗教学会会長(1963-64)等、数多くの要職を歴任された。アメリカ思想界を代表するシリーズとなっている“The Library of Living Philosophers”の一巻に近く加えられ、アインシュタインやラッセル、ホワイトヘッドと相並ぶことになるという。

今回ここにその一部を訳出した著作『全能なる神：伝統的な神学に見られる6つの誤謬』は、1984年に出版されたものである。ハーツホーンの87歳の時の著作にあたる。序文でも述べられているように、この著作は5週間という短期間のうちに異例の早さで書かれたが、従来の著作には見られない平易な表現で自らの哲学を語ったものとして際立った特徴を持っている。「神はなぜこの私に苦しみを与えられるのか。」病める人々の切実な問いに、理論的な観点から答えようとするのが、本書の狙いである。神学〈形而上学〉は、単なる宗教ではない。根本主義者のように聖書

の一字一句をそのままに信じて足れりとすることはできない。神学は一個の学である。これを忘れて、盲目的に神の言葉を聞くことは、学問を放棄するにも等しいであろう。しかしハーツホーンの目指す神学は、先の問いに真剣に答えようとする点で、同時に生ける神を志向している。学としての神学を放棄せず、同時に生ける神を志向する原理となるもの、それが、いわゆる二面的超越性の原理である。アウグスティヌスを始め、トマス・アクィナスにおいて頂点に達する伝統的な神学〈古典的有神論〉は、あまりうまく理解されなかったギリシャ哲学と、あまりうまく学問的に解釈されなかった聖書との妥協の産物だと、断罪される。神は、単に、無限なるもの、必然的なもの、永遠なるもの、絶対的なものではなく、無限的かつ有限的、絶対的かつ相対的、必然的かつ偶然的、永遠的かつ時間的なものだと言うのである。

ここに訳出された部分は、序文と第一章の一部にすぎない。従って、二面的超越性の原理については、未だ直接には述べらるに至らない。しかし、伝統的な神学に対する6つの誤謬が簡潔に述べられている第一章の部分を参考にすれば、彼の主眼は明瞭となろう。ただし、その叙述の簡潔さが、理解の妨げにならないように、各誤謬について詳述される部分を中途まで訳しておいた。それが、「古典的有神論のどこに誤りがあるか」以下の部分である。なおこの解題は、近く行路社より出版されるハーツホーン著『ホワイトヘッドの哲学』の訳者あとがきから、一部抜粋し、加筆したものである。

## 序 文

この書物を書こうと思い立った動機は、幾分唐突なものであったが、全く具体的な状況から起こっている。というのも、これは二人の知的に洗練された女性との会話が、直接のきっかけになって生まれたからである。彼女達は共に、事情を異にしながらも、普段から慣れ親しんできた神の観念がばかげたものだという感じに悩まされてきた点では、ほぼ偶然に一致した見解に達したのである。この二人の女性との会話によって、私は（二人の女性に限らず）多くの人々が、素人ながらも哲学や神学の問題に真面目な関心を寄せておられることに、あらためて強く気づかされた。勿論そのような人々には、比較的最近になって起こり始めた宗教哲学の重要な変化は、全く殆どといってよいほど知られてはいない。この二人の女性をはじめ他の多くの人々が、現在でも広く受け入れられている伝統的な神学の形態（私はそれを「古典的有神論」と呼んでいる。）に対して抱く先のような反感は、特に今世紀に入ってから、「哲学や神学を専門にして真摯な活動が続けてきた多くの人達がこれまでに感じてきたことと軌を一にしている。彼らは、—— 全てが受けるべき当然の名声を受けているわけではないにしても ——、ある人達によって「プロセス神学」と呼ばれるような有神論の新たな形態を模索し、伝統的な神学に明晰さと充実な正当性を与えるべく努力されている。ちなみに私は、それを「プロセス神学」とは呼ばずに、「新古典的有神論」と呼んでいるが、これは「プロセス神学」に対する私自身の解釈を示すものである。この書物では、神の観念が見直される。伝統的な神の観念に代わるその観念を、できるかぎり簡潔かつ効果的に、提示し、弁護してみたい。これは、哲学や神学の専門家の為に書かれたものではないが、これを読んで専門家の方々が何も得るところがないと感じられるようだとしたら、驚きは隠し切れないし、少々がっかりもするというのが、正直なところである。とりわけ、現代の社会に広く行き渡

っている要求を満たすことができればと望んでいる専門家が、そのように感じられる場合には、特にである。

神学者だけでなく哲学者の間にでも、同意が得られず、またいかなる意見の一致にも達する気配が見られない以上、一般の人々に率直に提示できるのは、専門家に受け入れられるような類の理論ではなく、幾つか選択のできる理に適った信仰上の考え方を解明し、それらの考え方の賛否両論を明瞭にすることであろう。最終的な決断は、個々人が、それぞれ自分の身を打ち込んですべきことなのである。今日大多数の人々には、新聞や雑誌、書籍の影響などもあって、非宗教的であることが当然の選択でもあるかのように、語られたりしているが、宗教的であることについては、ほとんど些かも語られていないのが実情である。信仰を何の制約もなく自由に選べるということこそが、宗教的な自由というものの持つべき本来の意味合いなのである。その種の選択は、過去に見られたように拘束されたものであってはならず、もっと自由に為さるべきものであろう。この書物では、そのうちのただ一つの選択だけが直接に示されることになる。ただしそれは、一つの余りにも馴染みになりすぎた信仰上の考え方に対する反論という形を取っているのだから、かなりの人々には、神学上の新たな考え方に接してもらえないのではないかとと思っている。

これまでに、私は、私自身が書いてきた書物への様々な反響から実に色々なことを学んできたが、その結果から言わせてもらえば、私がこの書物で示した見方によって、人生が変えられるということである。伝統的な幾つかの信仰上の問題、例えば、我々が実際に人生において遭遇する諸々の悪と、神の力ないし善性とを、どのように和解させればよいかというような問題についても、完全に解決されるか、あるいは少なくとも、その衝突が緩和されるということである。この書物を書くに当たっては、専門用語や専門家にしかわからないような言回しは極力避けるように努めた。それによって、より多くの人々に自分の考え方を知ってもらうためである。

私はこの書物では、率直な意見を述べた。宗教的には、私は根本主義者ではない。このことははっきりさせておきたい。しかし私は神の存在を全く信じているし、存在解明の鍵となる神の愛や、我々の動機づけを全て（理想的に）そのうちに取り込む神に対する愛に、および神に——対する——価値という同じ原理から判断すれば、——我々も我々自身をそのことによって判断すべきように——価値があり大切なものである同胞の、被造物に対する愛に、なんら疑いをもってはいい。つまり、「私は律法と予言者を廃するためにきたのではなく、成就するために来たのである」

(Matthew 5,17)というイエスの言葉を私は受け入れる。それが宗教の要だからである。宗教的だというのがこのようなことなのだとすれば、私は他の誰とも同じ様に宗教的だと思う。しかしこのような考え方を採るからといって、私は、敬虔なユダヤ教徒達（ユダヤ教徒たちのなかには私の考え方に好意を寄せている者がいる）、やユニテリアン教徒達（彼らの間にも私の考え方を気に入っている者がいる）、あるいは他の多くの宗教徒達を見下しているわけではない。

私の原稿をタイプしてくれたコリーン・キーク女子には、感謝の言葉ありません。物書きとしての私の生涯のうちで、彼女との出会いは最善の出会いだったと思っています。お陰で数年来私は楽しんで仕事ことができました。まったく最高のタイピストです。

いつもながら、あるいはいつも以上に、妻のドロシー・C・ハッホーンには、感謝しております。この書物を出版するにあたって、いろいろと編集途上で助言を与えてくれました。今回のように短期日で書き上げたような場合には、彼女の援助は何よりのものでした。（細かいところを

別にすれば)五週間で書き上げられたのはこの書物が始めてです。先に出版した書物は、印刷に付するまでに数年もの期間を要しました。今回のものが短期日にできたということが、先の書物と比べて、内容にどれほどの開きを生み出しているかの判断は、読者の方々にお任せしようと思います。

チャールズ・ハーツホーン

## 第一章

### 共通して認められる神に関する六つの誤謬

#### 〈六つの誤謬の素描〉

この章では、これまでの大多数の学識ある聡明な哲学者や神学者達が、数々の宗教的な伝統において何世紀にも互って主張してきた神に関する六つの観念について、とりまとめて最小限の批判と論議をしてみたい。私を含むかなりの人々が、——そのなかには現代の高名な何人かの神学者や哲学者が含まれている——、それらの伝統をそのままでは受け入れられないと感じてきているからである。我々の矛先はある古い伝統に向けられるが、これは伝統を全く無視するというのではなく、伝統のなかに立ちながらも、幾分新しいと言えるような伝統のなかで、古い伝統を批判するという意味である。このより新しい伝統では、なおある程度は(保留つきではあるが)、ある第三の伝統とも言うべきものにも訴えかけられる。つまり旧約聖書や新約聖書を含む数々の聖典にみられる、実際に古くからある第三の伝統にも訴えかけられる。なぜなら我々が「神学上の誤謬」と言う場合、それが、神という言葉に、聖典や具体的な宗教的敬虔さにおいて意味されているものとは一致しないような意味を、与えているという点を指摘することだからである。このような不一致は、一部には、中世の神学者達や近東の神学者達が、ギリシャ哲学には幾分通暁してはいたものの、他の哲学についてはほとんどそれらを見捨てた為に起こったものである。このことは、キリスト教とイスラム教との両方に認められるが、ユダヤ教にもある程度は認められる。これら三つの宗教においては、神秘主義が発展したが、それはその時点ではまだ様々な様相を取っていたし、幾つかの点では、ギリシャ的になりすぎた正統神学を部分的に正すものともなった。

次節では、私が古典的有神論(それは、中世の神学者達がギリシャ哲学を吸収した際に余りにも強くその哲学によって影響された神有論を指す)と呼ぶものに共通した六つの誤謬について、なぜそれが誤謬なのかを詳しく論議し、代わりに私が時に新有神論と呼んだり、またプロセス神学と呼んだり、新古典的有神論と呼んだりしている理論を提示することにしたい。——これは、最近かなり支持者が増えてきているこの種の理論を一般的な観点から、私なりに解釈したものである。

#### 第一の誤謬—〈神は全く完全であるので、変化しえない。〉

プラトンの『国家』に次のような一文が見られる。「神は、完全なるが故に変化することはできない」(つまり神はより良く成ることができない。というのも完全だということには、より良く成

るということなどありえないからである。またより悪く成ることもありえない。より悪く成るということは、腐敗、墮落、破壊、弱さ、つまり不完全さを示すものだからである。) 一見すると、この論議には説得力がありそうに思えるが、それは次の二つの仮定が妥当なものである場合に限り、そう言えるにすぎない。その二つの仮定とは、(一)「完全な」という意味が、どのような観点からみても変化を全く排除するものと解釈できるという仮定。(二)しかも神が完全だと言われるのは、この意味をおいて他にはない、という仮定である。しかし、ごく普通の意味で我々が完全だと言う場合には、変化が完全に排除されていないのは、明らかである。ワーズワースはかつて自分の妻を、「完全な女性だ」と言ったことがあるが、彼がそう言っからといって、自分の妻は全く変化しえないと言いたかったのでは当然ない。また聖書にも色々な所で、人間が完全なものとして語られたりしているが、これなども変化を完全に排除する意図があったわけではないはずである。聖書において神が完全なものとして語られるような場合に、それによって暗示されているのは、神においてさえ、どのような観点から見ても変化が排除されているということではなかった。また神が厳密な意味において変化しない(「変化する気配すらない」と直接に語られるような場合にも、なお曖昧さが残っていると見ることができる。神は、義においてはあるいは全く変化しえないかもしれない)が、このような義にみられる確固とした不変性に中立的で、矛盾しない在り方においては、もっと言えば、そのような義には不可決でさえあるような在り方においては、変化しうるものであるかもしれない。すなわち、神はいかに僅かな程度においても前者の観点においては決して変化しえないのだが、この不変性にもかかわらず、あるいはこの不変性のゆえにこそ、必ずしも変化しえなくはないということである。もし被造物が神の意志に従って振舞うとすれば、神はその振舞いの価値を高く評価するであろうし、かりに被造物がそのように振舞わないにしても、同じ様に神はその善性に相応しい表現で、また別の反応を示すことであろう。

聖書を書き記した人々は、ギリシャ哲学の諸問題を論じてはいなかった。彼らがギリシャ哲学の諸問題を論じているかのように解釈するのは、彼らに、古代のパレスチナでは生じたことのないような現代の様々な問題を論議させるに等しく、我々の方に責任がある。完全性というものが、考えられる限りのどのような観点においても、全く最大限の価値を含むべきものと見なされる場合には、意味をなさなくなるか、それとも矛盾したことになるということが、吟味のすえに明らかにさえなるかもしれないのである。そうなれば『国家』に見られる論議は、背理法による論議であって、なにものも証明しない論議だということになる。論理学者達は最近、抽象的な定義は無害のように見えるが、それらの意味を丁寧に調べれば、矛盾のあることに気づきはじめている。例えば、「全ての集合の集合」というのがそれである。同じことは、「可能な全ての価値の実在性」についても妥当するであろう。なぜなら、それにはいかなる附加も可能ではないという点で、矛盾が含まれているからである。もし完全性というものが、一貫してこのような最大限の価値を意味することができないのだとすれば、プラトンの論議は、充分なものではないということになる。ただしプラトンは必ずしも完全性の問題を、このようにだけ考えているわけではなかった。(第二章の「プラトンの世界靈魂」を参照)

## 第二の誤謬—〈全 能〉

神が、あらゆる点において完全なものとして定義づけられるからには、その力は完全なものでなければならないであろう。従って、生じるものは如何なるものも、神によって生じさせられているということになる。もしわたしが、癌によって死ぬようなことにでもなれば、神がその種の不運を招いたということになる。とすれば、なぜ私がこのような不運を受けねばならないのかということが問題になろう。この問題の一切は、「力の完全性」ないし「全能」ということにかかっている。ここにもまた、後で述べるように、曖昧さが認められうるのである。

## 第三の誤謬—〈全 知〉

神は変化しえずに完全である以上、神には生じるもの全てが永遠に知られていなければならない。我々の明日の行動が我々によって未だ決定されていないにもかかわらず、常に永遠に互って神には見て取れるということである。神には未決定の未来など存在しないのである。もしそうでなければ(その論議に従えば)、神は無知であって、不完全な知識しか持たず、我々が何をするかを待って見届ける必要があるということになろう。従って、我々がいかに自由な決定をなしても、それは、我々の決定が神の生に何らの附加も生み出さないのだという、例の心理にともかくも抵触しないものでなければならないわけである。ここで問題となるのは、無知や増加を免れた完全かつ不変な認識という用語である。つまりこれらの概念は全て、著しく明瞭さに欠けているということ、そして伝統的な神学は、論点を先取してその曖昧さを解決していたということである。

世界の歴史を隈なく覆うような不変なる全知という観念は、面白いことに古代ギリシャの哲学では(人間の自由を否定したストア哲学は例外にして)明瞭に述べられていないばかりか、アリストテレスによって否定されてもいるのである。聖書では、はっきりとは肯定されていないし、インドや中国や日本の哲学でも、あまりはっきりとは述べられていない。全能という概念同様に、この全知という概念も、ごく最近の宗教思想においても、いまなおそのままにまかり通っているのが実情である。しかし一方では、シェリングやホワイトヘッドを含めて、数多くの有能な勇氣ある思想家達は、それを拒否し続けているのである。

## 第四の誤謬—〈神の非共感的な善性〉

古典的有神論によれば、神の我々に対する「愛」は、我々に対する共感を示すものではないとされる。つまり神は、我々の喜びや幸運によって幸せにされたり喜びを感じさせられたりもしなければ、また我々の悲しみや不運によっても心を痛めることもないというのである。もっと言えば神の愛は、善行をなす太陽のように、地球上の無数の生き物に恩恵を与えながら、自らはその善行から何の恩恵も受けないのだと言う。太陽がその働きによって何も失わないように、(現在の我々には、これが誤っているのはよく知られている。)あるいは、神の慈悲深い御業は、たとえどれほどそこから水が流れても、いつまでも減ることがなく、しかも他から水を受けることもない、溢れる泉のようなものだと言う。結局、神の愛の模範と見なされたのは、太陽と泉という二つの

誤想された自然現象であって、これは、どう見ても人間的な愛の模範にはなりそうもないようなものである。このような誤想の源は、理に適った心理学にではなく、未熟な物理学と天文学とにあった。

要するに、西洋神学はもっぱらおよそ二先年にも渡って、完全性という概念を十分に分析しないまま、真に精神的な概念よりも唯物論的（および前科学的）な概念を好むという偏向に基づいて論議をしてきたということである。

### 第五の誤謬—〈死後の生としての不死性〉

我々の存在が神にとって重要なものであれば、あるいは神が我々を愛するものだとなれば、我々被造物は死んで後も単なる死骸に帰することはないであろうと、主張された。従って、神有論者は、我々が死後にも何らかの形で生きながらえると信じねばならないし、天国と地獄との神話にも、何がしかの真理があるとせねばならないと、多くの者が結論づけてしまったのである。これでは、我々には次の二つの可能性しか残されていないことになる。すなわち単なる死骸だけが後に残るか、それとも天国ないし地獄で新たに生活できるという可能性である。しかし後述するように、我々に対する神の愛に全く矛盾しないような、ある第三の可能性がある。

旧約聖書の多くには、例えば荘厳な『ヨブ記』にも、個体の不死性については、一言も触れられてはいないという点は留意すべきである。今日でも敬虔なユダヤ教は、人間の不死性を肯定することにはかなり気を使っており、場合によってはそれを否定しさえもするのである。新約聖書においては、イエスはこの問題に関連するようなことは殆ど述べてはいないし、少なくとも一人の著名な神学者（ラインホルト・ニーバー）によれば、先に挙げた第三の可能性というようなものについても、それを全く閉め出すようなことはいささかも明確には述べていないのである。

### 第六の誤謬—〈全く誤ることのない啓示〉

啓示の観念とは、神ないし宗教上の真理に関する、特別な知識の観念に他ならない。それは、ある人々によって保持されたものが、その人々によって他の人々に伝えられるような観念である。形式的には、この観念は理に適っている。他のどのような事柄においても、技術と洞察力には、千差万別の違いがあるというのに、なぜ宗教においてはそのような違いがあってはいけないのか。様々な科学には、我々が素人の意見よりも信頼を寄せるような、いわゆる専門家がいるものである。宗教に限って、その洞察力が他の誰よりも明晰で、深くより確かな人物がいけないとするのは、理に合わないであろう。どのような国を見ても、また如何なる時代にあっても、大多数の人間が探し求めているような宗教上の指導者は存在している。例えば仏陀、老子、孔子、モーゼ、ゾロアスター、シャンカラ、イエス、モハメッド、ジョセフ・スミス、メアリー・ベイカー・エディーなど。このような新たな指導者は、きっと我々のうちにも見出されるに違いない。宗教上の事柄では、完全な民主主義や平等主義などは、我々人間の本性を考えると、到底望みえないことなのである。指導者や創設者はその信奉者や弟子とは区別されるということが、我々の定めなのだからと言ってもよい。しかしこれには、程度の問題が、つまり資格の問題が残るであろう。どの程度

なら、あるいはどのような条件においてなら、その人物が宗教的に見て信頼するに足る、掛け替えのない人物だと言えるのかという問題である。これにどのような返答を与えるかによっては、過ちが犯される場合もある。つい数年前には、このような過ちによって、イギリス領ギアナのジョーンズタウンでは、数百人もの人々が死においやられた。ある者は自らの手で死を選んだという。

神を、意識のある、目的をもった存在と考えるような宗教では、啓示の観念は、特殊な形態を取りうる。宗教においては、それは単に、ある者が科学や政治に関して、より有能で知恵がありうるというのと同じ意味で、ある者が他の者よりも有能で、賢明だということを示すのではなく、神の知恵が、ある個人を、ないしは数人の個人を選び、支配下に入れるということ、そして彼らを、神自身の知恵を人間に伝える者とするということである。神は不謬である（全く誤りを犯すことができない）以上、もしこのような意味での啓示の観念に全く制限が認められないのだとすれば、誤り易き人間と全く誤ることのない神との区別は、消えてなくなることになる。新聞の編集者に次のような手紙が差し出されている。その差出人によれば、ある政治的な立場を支える為に、あなたたちが引く聖書からの引用には、「神の全能」という後盾があると言うのである。こうして、いかなる者も神のように賢明ではなく、全ての者が誤りを犯しうるという民主主義の根本原理が、それによって危うくされるのである。

啓示を当然のこととして主張する際にそれを弁護する一つの手立ては、いわゆる事実として報告される奇跡を持ち出すことである。しかしながら、どの宗教にも奇跡の一つや二つは報告されているのが実状である。従って、単にそれを主張するだけでは、啓示を保証するには足りない。仏陀は、生れるとすぐに喋ったと言われている。七世紀の日本を統治していた聖徳太子が死去されたときには、「雲一つない空から雨が降った」といわれるが、そのことによってその並外れた身分が証されたのだろうか。このようなことを信じない者（あるいは信じる者）は、一体どこで、どのようにしてこのような話を打ち切ればよいのであろうか。

### ＜古典的有神論のどこに誤りがあるか＞

「神は完全かつ不変」だということの二つの意味。「完全な」という言葉の文字どおりの意味は、「完璧に造られている」ないしは「完結している」という意味である。しかし神は全てのものを創るもの、つまり創造者と見なされる。とすれば、一体何が神を創りえたのであろうか（この場合、その創造が神に相応しいものとして達成されたかどうかは、どうでもよい）。「完全な」という用語は、神の実在を示すには貧弱な用語であるように思える。

あるものを「完全でない」と言うのは、一つの批判であるように思われる。つまり、それには欠陥を捜し出すことが含意されている。崇拜には、批判と欠陥の荒さがしは排除されている。神は、「全身全霊を打ち込んで愛され」ねばならない。かりにこれを受け入れるとしよう。とすれば、我々は、神を変化しえないものと認めねばならないのだろうか。変化というものが、悪い方向への変化や望ましくない方向への変化の可能性を、すなわち欠陥や弱さを、示すものと見なされる限り、確かにそうである。つまり神は悪い方向へは変化しえない。私が弁護したいと考えている見方は、このことを認める。しかし果たして変化という変化が全て、欠陥や弱さを示すもの



なのだろうか。良い方向への変化というものは存在しないのだろうか。人が良い方へ変化した場合には、我々はその人を誉める。健全な成長とは、そもそもそのような変化なのである。赤子や子供がそのような意味で成長するのを、我々は楽しみにするものだが、神について考える場合に、果たしてこのような事実から何も学ぶことはないのだろうか。

人間の子孫は、単に一つの受精細胞として、しかもそれ以前には受精能力のない細胞として始まっているのにたいして、神は確かにそのようなものとは見なされない。このように答えるのは容易である。しかし、人間的なものと崇拝すべき神とのいかなる類比も、単純に字面だけを真に受けることはできない。変化の完き善なる形式としての成長と神の生命とを比較するような類比もありうる。なぜなら、無限な豊かさでさえ果てしなく増え続けようと論じることとも可能だからである。偉大な論理学者であるバートランド・ラッセルが、私にその可能性を示してくれた。もっともラッセルは無神論者であって、私の神学についても、またいかなる神学についても、それを支持しようとする興味などは全く持っていないが。

上述した神の変化というものに対する伝統的な反論には、次のようなものがある。つまり、より良くなるということが全く不可能だという意味で、ある存在が既に完全な存在であるとすれば、その存在がより良い方向に変化することなど全く在りえないという反論である。ここには暗黙のうちに(二千年以上にも渡って)、他の如何なるものによっても決して卓越されず、また超越されないほど偉大で驚嘆すべきある価値を考えることが理に適ったものだとする前提が認められる。我々はこれが理に適っているとどのように知るのだろうか。私には、それは理に適っているとは思えないし、更に言えば、矛盾したことないしは無意味なことのようには思えるのである。

アンセルムは、神の完全性を「それ以上に偉大な（あるいは良い）ものが考えられないようなもの」と定義づけようとした。言い換えれば、神の価値は、全くあらゆる点において他の如何なる対抗者によっても超越されないだけでなく、成長の可能性もないものと見なされたということである。このような表現は一見うまく述べられているように見えるが、果たして明瞭な観念、矛盾のない観念だと言えるだろうか。「最大限に可能な数」というものを考えてみればよい。これもまた、巧みに表現された言葉だが、果たしてこれは何かを述べていると言えるであろうか。それは無限を定義づけるための表現であるのかもしれない。しかし私は、これを良い定義だと考えるような数学者にはお目に掛かったことがない。ごく標準的な数学においては、お互いに同等でないような多くの無限があるとは言われるが、最大の無限があるとは言われないのである。「無限」という言葉は、古典的有神論者がもっぱら好んで使う用語ではあったが、彼らは、考えられるその意味を十分に考慮したとは言われない。いずれにせよ、「有限でない」は否定表現であり、否定表現の意義は否定される肯定表現の意義に掛かっているのである。有限であるということが、如何なる意味においても、欠陥を、つまり不快さを、示すものとすれば、有限な事物からなるある世界を創造したということによって、神は不快な異論の余地のある行為をしたということになるのか。これは考えてみる値打ちがありそうである。

有限な事物は果たして神の偉大さに何か寄与することができるのか、できないのか。もしできるとすれば、有限なものによって為されるそのような各々の寄与それ自身は有限なものだということになろう。これは、有限性がともかくも、神の生命に確たる働きをしているという意味に取れるのではないのか。伝統的な見方に従えば、神は、なそうと思えばこの世界を創造しないこと

も可能であったということを考えてみよう。そのような場合には、この世界は些かも神の生命に寄与するところのないままにいたことであろう。また、神はこの世界をではなく、ある別の世界を創造することもできたのだとすれば、神はその一方の世界があるいは神に寄与したかもしれないようなものを現実には手にできないことになる。世界は神の善性に何ら寄与しないのだと言われるなら、尋ねるが、我々は一体日々何をしているのであろうか、あなた方が、我々の存在からは全く何も得ないような「神」に、我々が「仕える」ものだと言われるのはどういう意味なのか。

上述したことおよび他の諸論拠から判断して、神の完全性ないし無限性という伝統的な観念は、余りにも不明瞭、ないし曖昧な観念であったというが全く明らかとなる。その観念が固執される限り、懐疑主義は助長され、混乱と苦しみは増さざるをえなくなるということである。このような曖昧な観念が、当然の反発として、無神論を長らく育み続けることにもなったのである。

我々の宗教的な伝統を築き上げてくれた人達を公正に扱おうとすれば、ギリシャの哲学者達も結局は、神性を全く不変なものとして考えがちであったし、やはり彼らと同じ様に、多くの神的でない事物には新しさが全く欠落していると、余りにも誇張しすぎていたことを想起すべきであろう。天上の物体は生れ出ずることなければ死に絶えることもない。ただ円環的にのみ、変化しうるに過ぎない。つまり種は永遠に固定されたままなのである。ギリシャの原子論者達や唯物論者達は、原子を、位置を変えることによってのみ変化するものと考えていたのである。ヘラクレイトスは確かに、変化を遙かに基本的なものとする立場を示唆していたし、プラトンもある程度は彼に従っていった。神の一つの相を示すものとしては最善な解釈が施されているプラトンの世界靈魂は、全く永遠的であるというわけではなく、その時間的な次元では、「永遠性を動きのある描像」で捉えられていた。しかしながら、アリストテレスは、その神性の観点に関するかぎり、少なくとも、プラトン以上に永遠主義者であった。中世の思想は、アリストテレスによって影響されていたし、プラトンの永遠主義者としての側面を同じく強調したピロンやプロティノスによっても影響されていた。今日では科学も哲学も、ギリシャ人が絶対的なものとして仮定した如何なる世界の固定性をも全く認めなくなっている。——星も、種も、原子も全て固定したものではないのである。創造的生成は決して二次的なものではなく、存在と比べその実在性に欠陥があるものでもないということが、益々明らかになってきている。むしろ生成は、ベルクソンが言っているように、「実在そのもの」なのである。端的な存在というものは、単に抽象的なものにすぎない。とすれば、永遠性など全く存在しないことになるのだろうか。つまり全てのものが変化することになるのか。しかしこれは単に全てのものが変化すると言っているわけではなく（これについては五つ目の論題で取り上げる）、過去の現実存在については、永遠的であることを認めるという意味である。私の少年時代の経験は、変わることなく、まさに生じたままにそこに厳然と存在している。変化は、つまるところ、破壊としては分析されえず、新しさの創造としてのみ分析されうることである。古いものはそのまま持続しながら、新しいものがそれに付け加えられるのである。

神学において、欠点や欠陥、ないし異論の余地から免れているということ、およびその意味で完全だと言われるのには、二つの意味がありうるように思う。聖なるものが、崇拝するに足ると言われるからには、自分以外の他のどのような存在をも凌いでいるということではなければならない。つまりそれは、考えられる限りのどのような対抗者をも上回る気高さを持っているという点

で、他の存在によっては超越されえないものでなければならない。そうであればこそ、全てのものが神を、原理上、他のどのような存在にも勝っているものとして崇拜しうるのである。考えられる限りの対抗者をも凌ぐこのような気高さは、私が考える二つの完全性の意味の両方に当てはまる。卓越性には、次のような二つの異なった種類（規範）があるわけである。一つは、他の存在によっても、その存在それ自身によっても超越されないような絶対的な卓越性〈absolute excellence〉。これはいわゆる伝統的な考え方だが、この伝統的な意味での卓越性の定義には真理の半分だけしか示されてはいなかった。無視されたもう半分の真理とは、他のものによっては超越されないが、その存在それ自身によっては超越されるような絶対的に最善なるもの〈absolute best〉という概念である。これは、価値や偉大さを、全き具体相においてというのではなく、ただ抽象相において考えられている。しかもそれでいて神は、ただ単なる抽象概念であってはならないのである。

絶対的な最大値としてありうる価値の抽象相とは、善と知恵、つまり本来的な意味での無謬性、正義、つまり神の神聖さに他ならない（これには一つの属性が様々に表現されている）。我々は、神の世界認識および世界に関する神の決断を、対抗者のありえないような永遠的なものとして、かつ成長のありえないような無謬の義として、見なすべきである。神は、まずなによりも、全く悪意に満ちたものではないし、愚かなものでもない（つまり低級な動物のように、非道徳的で、論理的な諸原理を意に解さないものではない）。そしてそれゆえに義であり知恵に満ちたものなのである。しかしこのような抽象的な観点から見ると、神は常に批判からは免れているし、また世界との関係においては常に全き知恵と善に満ちたものでもある。神が成長しうるというのは、このような属性の成長を指すのではない。なぜなら善性や正義というような属性は、抽象的なものだからである。勿論価値のなかにも、ある意味では抽象的とは言えないような価値もある。

人間が牢獄に入れられたとしよう。彼はそのことによって、必ずしも、間違った信念を強要されるようなことはないだろうし、また人間性を喪失させられるようなことも、あるいは間違った決断を為すように仕向けられるようなこともないであろう。彼が失わざるをえないものは、美的な豊かさ、印象の豊富さである。彼は、世間にいる人々と同じ様には、世界の美しさを楽しむことができない。同様に、ヨブの受けた苦しみを今に受けているような人は、確かに幸せではないが、必ずしも、そのことによって以前のような高潔さが失われるわけではない。更に言えば、論理的な善と認識上の無謬性には、ある絶対的な上限があるということである。世界がたとえどのようなであろうと、神は誤りも無知もなく、その世界がどのような世界であるかを認識できるし、またその世界に応答することもできる。すなわち、神は世界が含んでいる現実的並びに潜在的な種々の価値に対して十分な考慮が払えるのである。その意味では神は全くの義である。しかしもともと世界には必要なものがなくて、あとから新たな調和を、つまり美的豊かさの新たな形式を獲得するのだとすれば、神によって知られる世界の美は、増して行くことになるだろう。神の享受がこのような場合に増すことがないとすれば、神の美的な受容力には不完全さがあることになるだろう。美的な価値は、価値のなかでももっとも具体的なものである。全てのものがその美的価値に寄与できるし、その価値を増すことができる。美に絶対的な上限があるという観念は、意味のない観念である。ライブニッツは美の絶対的な上限というものを定義づけようとしたが、彼がそれに成功したと敢えて言える者がいるだろうか。美とは、多様な経験の統一に他ならない。完全に多様なもの

を完全に統一するということは、全く意味不明なことと言うほかない。結局、神には美的な感覚が欠けており、その点では、我々は神を凌いでいるとするか、あるいは世界の美に対する神の享受には全く上限がないとするかのいずれかとなろう。

プラトンは神を、聖なる芸術家と見たし、パースとホワイトヘッドは、神に世界の詩人という言葉を与えた。芸術家はその芸術作品を享受してはいけないのか。詩人はその聖なる詩を享受してはならないのか。ヒンズー教徒は至福を至高な實在に帰し、西欧の多くの神学者達は神の幸せについて語ったきた。しかし幸せというものの絶対的な上限の可能性を注意深く吟味するというようなことは、一般には為されてこなかった。プラトンはなるほど「絶対的な美」について述べたが、その表現に整合的な意味を持たせるにはどうすればよいかを、我々に僅かでも確信させることはできなかった。

モーツアルトのシンフォニーに、バッハの曲が持っているような美の形式が全くないというのは、モーツアルトのシンフォニーの欠陥ではない。美に限界があるということは、なにも美に欠陥があるということではない。価値の最も具体的な形式には、上限など全く存在しはしない。常にそれには追加が伴うからである。神は現実世界とその先行者の持っていた全ての美を享受することができるが、創造性というものは、無尽蔵なものであって、如何なる現実の創造も、更に為される創造を不必要なものとはなし得ないのである。絶対的な美というものは、鬼火にすぎない。多くの者はこれまでそのような鬼火に誤り導かれてきたのである。単なる静的な存在では充分でなく、生成が必要だと言われるその合理的根拠は、この点にある。いかなる現実存在も、決して在りうるほどには在りえないのである。可能性としてはより以上のものがありうるだろうし、またそうでなければならないであろう。このことが、神に全く適用されないとみなすことは、我々が持っているような価値に対する手掛かりを放棄するに等しい。つまりそれは光を消し去って、後に残されたその闇をただ言葉を使って照明しようとするにも等しいということである。

### 「全能」の二つの意味

ここで批判されるような意味での全能という観念は、以下のようにして生じた。神であるためには、すなわち崇拝するに足るものであるためには、神は力において、他の全てのものを凌いでいなければならない(いかなるものにも批判されてはならない)。考えられる限りでの力の最も高級な形式は、神の力でなければならない。ここまではよい。しかし、問題は次の点に、つまり、その考えられる限りでの力の最も高級な形式とは何かという点にある。これは、これまで全く真剣に考えられたことのない問題であった。というのも、その答えは極めてはっきりしていると感じられていたためである。すなわちそれは、世界に生じるもの全てを細部に至るまで決定する力であると。ここで注意しなければならないのは、それが重要な影響を出来事に与えるというのではなく、厳密に出来事の細部を確定し、決定すると言われている点である。そうだからこそ、今日でもなお、人々は破局が生じた場合には、なぜ神は私にそのようなことをしたのか。と問うのである。何かそれには我々人間には推し測ることのできないような神秘的なわけでもあるのだろうか、なぜこの私でなければならないのだろうか。神学者達に、この不合理な実際ばかげてさえいる問いかけの責任を取ってもらいたいと、私は考えている。

自らにそのような問い掛けを為すこともなく、神学の伝統を築いてきた者たちが、暴君的な力の観念を受け入れ、神性にそのような観念を帰してもきたのである。「私は全てのものを決定し、

確定する。あなた方（およびあなた方の友人や敵）は、私があなた方に為すように決めておいたことをただ為せばいいのである。あなたの決定は、単にあなたに名を借りた私の決定にすぎない。あなたは、実際には、私の決定であることを、自分で決定していると思っていけばよいのである。」

神学者達は聡明な方々なので、事を余りに単純化しては申し訳ないであろう。彼らも、自分たちが難題に突き当たっていることには半分気づいていたのだから。多くの政治家同様に、彼らも、自分達の誤りを自分達にさえ隠そうとする曖昧な表現法に耽っていたのである。彼らにも、罪が、自由な決断に基づいてなされた悪事として、あるいは好ましくないものとして定義づけられるのは、分かっていた。つまり罪が、神の意志に逆らうものと定義づけられねばならないことは分かっていたはずである。しかし、どのようにすれば全能な意志に逆らえるのであろうか。これには二つの工夫が考えられた。一つは、神は罪深い行為を生み出すようには決定してはおらず、ただそのような行為を妨げないように決定しているだけだ、と言うことであつた。神は、罪が生じるのを「容認する」と見るわけである。このような神の決定を利用して、罪人は自身の行為をなすのである。しかし神は世界に生じる全てのものを正確に決定するものと考えられていたのではないのか。もし仮に誰かが私を殺害するとすれば、私が殺害されるというその行為は、神によって決定されていることになる。従ってここで使われている「容認する」という言葉には、普通には持っていないような意味があるのは明らかである。第二の工夫はこのことに関係している。一般的に言えば、X が Y にしかじかのことをなす自由を認めるとする場合、為されるその行為には、少なくとも X によっては具体的には特定できないような細目があると言ってよい。（おそらく具体的には述べられ得ないであろう。というのも、人間の言葉では、せいぜい具体的な出来事の輪郭が与えられる程度であつて、細目を十分に表現することはできないからである。）しかし全能というのは、生起するもの全てを絶対的に確定する力として定義づけられる。私がここで特に念頭に置いているのは、トマス・アクィナスである。神は被造物に A という行為を為す自由を認めているが、しかしその行為 A は、輪郭などではなく、まさに十分な具体性をもった行為そのものである。そうすると被造物には、全く決定すべきことが残っていないということになるのか。一体何が被造物の自由になるものとして残されているのか。

最も有名なスコラ学者は、上述した二つの工夫のうち二つ目のものを取ってその解答に充てた。神は、被造物が A という行為を為すように決定してはいるが、神のその決定は、それにもかかわらず、その行為が「自由に」なされるように決定されいてると言うのである。笑ってはいけない。その聖者は真剣である。真剣なのだが、曖昧な表現法に落ち込んでいるのである。被造物の未来の行動は正確に決定されているが、個々の人間はその行動を自由に為すように決定されているというわけである。これは、悪党が、為すべきことをはっきり指示したあとで、「お前の好きにしてい」と、つまり自分の意志で自由にやれと、言うようなことに等しい。これが、暴君的な力の観念でないとすれば、一体何だというのか。

今一度、考えられる限りでの最も高級な力の観念とはなにかを問うて見よう。それは、暴君的な力の観念を無限にまで拡大して、無理やりにでも「慈悲」の観念に近づけようとするものなのか。これが、（ある程度無意識的であるとは言え）神学者たちがこれまでに取ってきた見方のようなのである。他に良い方法はないのだろうか。勿論ある。

それはつまるところ、新約聖書の——ギリシャの宗教にも見られた——神と親の役割とのアナ

ロジーに他ならない。ただしその当時では、男性優位の観点が絶対視されており、当然それは父親に類比さるべきものであったであろうという点は別にしてである。果たして理想的な親の役割とは何であろうか。あらゆる点において親が全てを決定するという事なのだろうか。この間そのものが答えを暗示しているように、理想的な親とは、知性の増大に応じて、子供に自分の行動を自分で決定させるように持って行く親であろう。賢明な親は、たとえ幼児に対してでも全てを決定しようとはしないし、また成熟途上にある子孫のためにも、あるいは既に成熟した子孫のためにも、親はそうしなければならないのである。このことを理解できない人々が、アン・ランダースに悩み事を綴って、結局話の種にされたりするのである。神のことを考えようとする際には、我々は価値に関して知っていること全てを忘れねばならないのか。哲学者や神学者達の著作を読む場合には、殆どそうしなければならないこともあるようだが。

もし両親が全てを決定しないのだとすれば、その結果には、衝突や失敗の危険が伴うことになるだろう。子供には、誤りなき知恵も善もないからである。しかも後で述べるように、確かに神の知恵でさえ、他のものが将来決定するようなことの全てを、完全には予見できない（つまり無時間的に知ることができない）のである。人生は、もっぱら決定をなす過程に他ならない。言い換えれば、人生そのもののものが本質的に危険に満ちたものだということである。神でさえ、それを変えることはできないであろう。危険のない世界など考えることができないからである。かりにそのような世界があるとしても、それは、全体的に見れば、せいぜい良くもなければ悪くもないような、いわば死せる世界とでも言えそうな世界となるであろう。

決定をなしていると思うことは許されているが、実際にはその振舞いの全てが完全に別のものによって決定されているような、そのような操り人形達を支配する理想的な最高の力というものが、果たして存在するのだろうか。二千年前の間、神学者達は、この問題に対して、そのような理想的な力があると答え続けてきているようである。

なかには、神は、全てのものを決定できるが、自分が自由な被造物を持っているという有難さには感謝の意を示さないものだ、と言う神学者もいる。つまり神は、ある一定の自由に応じるような人間を選んで創造すると言うのである。物事が悪く運ぶような場合には、それは、その選ばれた者が自分たちに許された自由を邪に使っているためだとされる。このような見方は、悪の問題を解決する方法としては、宗教の理論家が一般に我々に示してきたようならぬ解決策よりは、おそらくましなものであろう。がしかし、充分なものとは言い難い。悪事の多くが、人間の自由に起因するものだというのは、おそらくあり得ないことであろう。病気は、確かに、自分を大切にしないような人々の場合には、すなわち節制に気を使わないような人々の場合には悪くなるし、病気になる可能性もそのような人々の場合には高くなる。しかし病気は単に、そのような不節制によってのみ生じているわけではない。人間の自由によって、動物の受ける全ての苦しみは、——例えば、飢えや雌争いによる負傷、捕食者の攻撃による怪我、さらには病気や寄生虫などから受ける苦しみは——生み出されるわけではないし、他の諸々の原因についても、それらが人間の自由によって思うままに操られるというようなこともない。

悪の問題を解決する方法として「取り上げる値打ちのある」ものは、一つしかない。それは、自由という観念を使うことである。ただしその観念は一般化される必要がある。なぜ人間だけが決定を為すものと見なされねばならないのか。確かに人間は、他の動物が必要と思える以上に、

その決定過程を意識している。がしかし、そうだとすれば幼児は果たして、どの程度意識してその活動を決定していると言えるのだろうか。もしチンパンジーに全く自由がないのだとすれば、適当と思えるあらゆるテストから判断して、大人のチンパンジーよりも遙かに知能の低いと見られる幼児には、一体どの程度の自由があるというのだろうか。(幼児が猿にも劣るというこの事実を、「墮胎反対者」のように、つまり胎児も一個の人間であって、その意味では、人格に対する基準は緩められる必要があるという観点から、考えようとする者は全くいないであろう。)

神学者達がおよそこの百年の間に採ってきた次のような結論には、支持するに足る論拠が数多くある。すなわち、その結論とは、別な観点から自然を全体として見た場合には、それに自由が認められないからと言って、我々に少なくとも自由があるということを絶対的な例外とするのではなく、自由を、原子や更に小さな粒子に至るまで、実在の全てに浸透している一般的な原理が強められ、拡大された特殊な形式と見る、という結論である。多くの物理学者が認めているように、現代の物理学は、この事実と矛盾するものではない。この事実が一般的な教養として神学者達に受け入れられるのは、一体いつのことなのだろうか。

宗教哲学にはニュースとなるようなことがあるのに、新聞では全く扱われないし、定期的に出版されている総合雑誌にさえ、全く話題にすらされない始末である。かなりの人々が宗教的であろうとする欲求を持っていながら、宗教の諸問題を合理的に論議するということには躊躇せずにはおれないというのが実情である。これは、民主主義の向上を示すものというより、むしろその低下を示すものであろう。人々は、宗教哲学ではほとんど不要となった哲学的な理論（なぜ神は私にこのようなことを為されたのだろうか。）を暗に示そうとし続けているのである。同じ事はまた、哲学と科学に精通しようと努めている神学にも言えるであろう。

古典的な伝統に深く染まっている者は、「神の主権」を真実なものとして認めようとし新しい神学には、おそらく反論しようとするであろう。そのような人々には、次のように答えたい。「我々は天にいますイエスの父を（あるいは至福なる慈悲深きダビデやイザヤの父を）崇拝しなければならないのか、それとも天にいます王を、つまり宇宙の独裁者を崇拝しなければならないのか。」これらは両立しない理想である。素直に考えようとする者は、どちらかを選ぶべきであって、両方に忠誠を誓う振りをすべきではない。ホワイトヘッドが言ったように、「彼らは、シーザーに認められる性質を神に与えたのである。」我々の祖先が神的な本性のモデルをどこか適当なところを探し求めた時代に比べると、たとえ弱められた形とは言え、王や皇帝に対する畏敬の念が今なお生きている我々にとっては、先のような神の観念を受け入れることはたやすい。「神の主権」という言葉は、ある人々には、一種の信仰告白に近い響きを持っているが、それは、神の主権が全き力を示すものであって、人の最も賞賛する惜しみなき愛を示すものではないと認めることなのである。

子供の頃から、私は神の愛を崇拝するように言われてきた。神の力とは、端的に言えば、凌ぎ得ないような愛に興味を起こさせるような力〈appeal〉に他ならない。再びホワイトヘッドの言葉を引用すれば、「神の力とは、神自らが吹き込む崇拜心」なのである。それは、我々がゼウスの恐るべき落雷を聞き、その稲妻を見、そのような力の前にひれ伏すということではない。そうではなくて、それは、神的な美やその荘厳さを我々が感じ取り、否応なくそれに答えるようなものなのである。他の動物でさえ、それを感じるであろう。我々にできて、動物にできないことは、

神的な美やその荘厳さを考えることである。ホワイトヘッドは言う。神は、それぞれの被造物がもっている神的な視界の「荘厳さ」によって世界を導き、その世界のうちに被造物の在るべき場所を定める。神は、「各々の現実的実有とその現実（過去）の世界を共有しているのである。」「神は理解を共にする苦悩の同伴者に他ならない。」

ホワイトヘッドは、プラトンとアリストテレスにおいて、世界を動かすものは神的な美であるという素晴らしく洗練された理論を学んだ。しかし、一体他の全ての美を越えるような神的な美とは何なのか。古代ギリシャでは残念ながらこの声は完全には聞き取れなかったのだが、これまでも、数限りなくこのような声は聞こえていた。にもかかわらず、我々は未だに、他の全ての美を越える美が、愛の美であるという声を、そして人生は、その愛の美がなければ何らの意味もないという声をほとんど信じるに至っていない。まして理解しているとは言い難い。一方、ギリシャ人達は、愛が究極的な原理であることを否定する誤った論議を、緻密に展開していたのである。愛には、我々には自らのうちに可能な全ての価値を持ち得ないということが、つまり価値を付け加えるという希望は別のものに託さねばならないということが、含意されていると彼らは考えた。彼らは、そのような考えのなかに含まれる論点先取を看過して、あたかも価値が、もっぱら単独で一なる存在において無尽蔵に実現されうる何ものかであるかのように考え、結局「自らのうちに可能な全ての価値を持つ」ということを、実際に吟味しないままに理に適ったものとしてしまったわけである。もしそれが可能だとすれば、そのような価値をもつものは、愛するために他のものを必要とはしないだろうし、ただ孤独な栄光のうちにのみ自らの高揚化を求めて存在するに過ぎないものとなろう。つまり、人生の意味を探る一つの手掛かりが、可能な善を無尽蔵に実現化するという単なる言葉上の理想によって捨て去られているのである。

(1988年 9 月30日受理)